

ボードレール『悪の華』「葡萄酒」詩群を読む

Une lecture du cycle du Vin des *Fleurs du Mal* de Charles Baudelaire

清 水 まさ志*

要旨

本稿は、十九世紀フランスの詩人シャルル・ボードレールが1857年に刊行した詩集『悪の華』の初版を中心に、第四部「葡萄酒」の役割と意義を古代的・南方的・楽園的特質の観点から考察し、またその部に含まれる二詩篇「葡萄酒の魂」「屑屋たちの葡萄酒」を、第一部「憂鬱と理想」の冒頭の二詩篇「祝福」「太陽」と比較しながら、抒情詩人の在り方とその力に関して考察したものである。

キーワード：フランス文学(French Literature)／ボードレール(Charles Baudelaire)／『悪の華』(The Flowers of Evil)

はじめに

十九世紀のフランス詩人シャルル・ボードレール(Charles Baudelaire, 1821-1867)¹の詩集『悪の華 (*Les Fleurs du Mal*)』に関して、ドイツの作家ヴァルター・ベンヤミン(Walter Benjamin, 1892-1940)は、『悪の華』はヨーロッパ的な影響を及ぼした最後の抒情詩集であった (*Les Fleurs du Mal sont la dernière œuvre lyrique qui ait exercé une influence européenne*)²と述べた。『悪の華』は二十一世紀の現在に至るまで、フランスを代表する文学作品に数えられるばかりでなく、世界文学の遺産のひとつとして読み継がれている。なぜならば、資本主義社会の原点に位置する十九世紀ヨーロッパの首都パリにおいて、その社会で生きる苦悩をうたったボードレールの抒情性は、今も世界規模でその社会に取り込まれていく地域の人々が必然的に感じざるをえない苦悩を代弁するからである。筆者は、ボードレールの批評作品を中心とした研究に引き続き、ひとつの詩的風土として『悪の華』における「北方」性の解明を目指した研究を進めている³。本稿もその研究の一環として、『悪の華』初版における第四部「葡萄酒 (Le Vin)」の役割と意義を、「南方」的特質の側

面から探ることがねらいである。さらにその部に含まれる詩篇「葡萄酒の魂 (L'Âme du vin)」と「屑屋たちの葡萄酒 (Le Vin des chiffonniers)」を、第一部「憂鬱と理想 (Spleen et Idéal)」の冒頭の二詩篇「祝福 (Bénédictioin)」 「太陽 (Le Soleil)」と比較しながら、抒情詩人の在り方とその力について考察してみたい。

1. 『悪の華』における「葡萄酒」の位置をめぐって

詩集『悪の華』は、あたかもパリの街のごとき様相を呈している。詩人は生涯に一冊の詩集しか残さなかったため、その一冊のなかに二十年以上の年月に渡る作品が重層的に含まれる結果となった。それは古い建物が残っている限界もあれば新しく開発された限界もあるといったパリの街を思わせる。1857年の初版と1861年の第二版では、五篇を含む「葡萄酒」の部が、詩集の構成順序において位置変更された。初版では第四番目の部として第三部「反逆 (Révolte)」と最終部「死 (La Mort)」の間に置かれていたが、第二版では第三番目の部として「パリ情景 (Tableaux parisiens)」と第四部「悪の華 (Fleurs du Mal)」の間に置かれる。詩集の構成に関して詩人は非常に意識的であったゆえ、その位置の変更は無意味だとは考えられない。しかし「葡萄酒」の部は、注釈者によって比較的軽く扱われることが多い。プレイヤード

* SHIMIZU, Masashi
北陸学院大学 非常勤講師

版の注においても、初版においては「人工樂園」を探求し、「死」の前で一時的な鎮静を表す部、第二版においては劫罰の一段階を表し、新たに創設された「パリ情景」と「悪の華」を繋ぐ役割の部と説明されている⁴。

「葡萄酒」に収められた五篇はいずれも初期の作品だと推定され⁵、「葡萄酒」の部はいわば古い界限である。「葡萄酒の魂」や「屑屋たちの葡萄酒」の内容は、1848年の二月革命前後の社会主義的運動と関連している⁶、1851年のルイ＝ナポレオン(Charles Louis-Napoléon Bonaparte, 1808-1873)のクーデターを経てボードレルの政治的関心が薄れていくなか、「葡萄酒」の部が持っていた当初の意義が失われていくのは確かである。それゆえにピエール・ラフォルグが「屑屋たちの葡萄酒」の異文を比較して、1848年の二月革命からまだ遠くない初版においてその詩篇がもっとも革命的意味合いを強く備えていたと主張するのをもっともだ⁷。筆者もまた、芸術家と公衆の関係に関するボードレルの考えの変遷を考察したさいに、明らかに五十年代以降、革命的・社会主義的関心が失われていくことを裏付けた。ボードレルは、芸術家と公衆が相互的な協力的関係を築くのは不可能だと考えるに至り、都市に生きる群衆を芸術家が一方的に見る態度に芸術活動の基盤を置くようになる⁸。

「葡萄酒とハシッシュー個性を増加させる手段としての比較(Du vin et du hachish, comparés comme moyens de multiplication de l'individualité)」(1851)は、「葡萄酒の魂」と「屑屋たちの葡萄酒」の忠実な散文ヴァージョンを含んでいる。人間の知覚を刺激する興奮剤の研究はその後も途切れることなく、「ハシッシュの詩(Le Poème du haschisch)」(初出1858)、さらに「阿片吸飲者(Le mangeur d'opium)」(初出1860)と続き、1860年にこの二篇を『人工樂園(Les Paradis artificiels)』の総題で刊行するが、その際に1851年の論考を含めなかったため、葡萄酒に関する詩人の関心の低下をそこに読み取ることができる。確かに1851年の論考は、ハシッシュの部分は「ハシッシュの詩」の内容と重なり、葡萄酒の記述はすでに刊行されている『悪の華』の「葡萄酒」の部と重なるゆえ、そうした理由で省かれたと考えるこ

ともできる。さらに「ハシッシュの詩」と「阿片吸飲者」を丹念に読んでみると、異なる興奮剤の効果の違いよりも、芸術家的気質を持った人格に興奮剤がどのように作用するのか、その点に関心の焦点が絞られていくことがわかる。こうした観点からも『人工樂園』において「葡萄酒」の記述が省かれたと考えられる⁹。

『悪の華』の古い界限である「葡萄酒」の部は、筆者の「北方」性の問題と関連していると想像される。なぜならば詩人がヨーロッパの地理的・歴史的図式を表す「北方」/「南方」の区分を用いて、自らのロマン主義理論を明言したのは『1846年のサロン(Le Salon de 1846)』(1846)においてであるので、その著作と同時期の詩篇にその形跡がより明瞭に読み取れるのではないかと考えられるからである。「葡萄酒とハシッシュ」の第三章の最後において、「葡萄酒」の広く一般的で人間的な特質と、ハシッシュの特殊で反社会的な特質が対比される。さらに第六章において両者の効果の違いは次のように対比される。すなわち、肉体的側面において葡萄酒は健康的でハシッシュは不健康的、性格的側面において葡萄酒は社交的で勤勉だがハシッシュは孤独で怠惰、使用者の観点においては葡萄酒は民衆と労働者向きだがハシッシュは暇人向き、さらに葡萄酒は有用で生産的だがハシッシュは無用で非生産的である。このように1851年の論考において葡萄酒はかなり肯定的に捉えられ、その特質は当然「葡萄酒」詩群にも表れている。クレペ＝ブランの注解は、「葡萄酒」の部は詩集全体のなかで「少々たわいない陽気な調子(une note de gaieté un peu puérile)」で際立っていると指摘する¹⁰。筆者の観点からすると、「北方」的な全体のなかで「葡萄酒」詩群には「南方」的な特質が際立って見られるからではないかと考える。そして葡萄酒とハシッシュの特質の違いを、この観点から対比させることもできるのではないだろうか。すなわち、歴史的観点から葡萄酒は古代的でハシッシュは現代的、また地理的な観点から葡萄酒は「南方」的でハシッシュは「北方」的、さらに神学的観点から葡萄酒は地上樂園的でハシッシュは失樂園的であると。これから「葡萄酒」詩群の古代的・南方的・地上樂園的性格を考察していく。

2. 葡萄酒の力、「第二の青春」

十八世紀のモンテスキュー (Charles de Montesquieu, 1689-1755) 以来、ヨーロッパの地理的「南方」/「北方」の区分は、歴史的に「古代」/「近代」の区分に対応して論じられてきた。さらにこの区分は、スタール夫人 (Madame de Staël, 1766-1817) によって、古代を規範に仰ぐ新古典主義と、同時代の表現を求めるロマン主義の区分に応用され、十九世紀前半に広く流布した。ボードレールもまた『1846年のサロン』において、自らのロマン主義を定義するさいにこの区分を用いる。ボードレールは、ロマン主義を「現代芸術 (art moderne)」と定義し、その特質に「諸芸術が含むあらゆる手段によって表現された、内面性、精神性、色彩、無限への憧れ (intimité, spiritualité, couleur, aspiration vers l'infini, exprimées par tous les moyens que contiennent les arts)」を挙げる。さらに「ロマン主義は『北方』の息子であり、『北方』は色彩家である (Le romantisme est fils du Nord, et le Nord est coloriste)」と述べ、ロマン主義の特質を「北方」に結びつけ、古典主義の特質を「南方」に結び付けて対比する。風土的な違いが芸術的な特質を生むと考えるとき、違いを決定づける自然的要因は太陽の光と大気中の水分にある。「北方」は太陽の光が乏しく空気中の水分が多いため色彩的・絵画的であり、自然そのものが美しくないのでこの世とは別の夢と幻想の世界へ憧れる傾向を持つ。それに対して「南方」は太陽の光に溢れ空気中の水分が少ないためデッサンの・彫刻的であり、自然界そのものが美しいためこの世以外の世界に憧れる傾向を生まない。ボードレールはさらにこの区分に神学的意味も与える。すなわち「北方」は失樂園の地に相当し人間の苦悩を表現し、「南方」は地上樂園に相当し人間の幸福を表現する¹¹。このようにボードレールは、地理的・歴史的・神学的な三重の観点から「北方」/「南方」という図式を用いて、自らのロマン主義を定義している。

葡萄酒、ハシッシュ、阿片に関する興奮剤研究もまたボードレールのロマン主義理論の延長線上にある。それは特に神学的観点から、地上樂園を追われた人間が人工的に樂園を獲得する手段の研究と位置付けられる。それゆえ葡萄酒にせよ、ハ

シッシュや阿片にせよ、興奮剤が求める効果は、歴史的に言えば現代において古代、地理的に言えば「北方」において「南方」、神学的に言えば失樂園において樂園を、人工的に取り戻すことにある。しかしここでハシッシュや阿片と葡萄酒が根本的に異なる点がある。まずそれは葡萄酒そのものが古代的・南方的・楽園的な出自である点である。葡萄の栽培に適した地と葡萄酒文化の発祥の地は「南方」であり、その文化は古代にまでさかのぼる。次に効果の点から見て、ボードレールは「阿片吸飲者」において葡萄酒と阿片の効果の違いについて次のように対比させている。すなわち、葡萄酒は主に「人間の官能的部分 (la partie sensuelle de l'homme)」、「純粋に人間的部分 (la partie purement humaine)」、「人間の粗暴な部分 (la partie brutale de l'homme)」¹²に作用すると。すなわち葡萄酒は樂園の状態を主に肉体的・官能的側面を取り戻させるが、ハシッシュや阿片のように精神的・道徳的側面において取り戻させるわけではない。形容詞「粗暴な (brutal)」は、ボードレールが『1846年のサロン』においてまさに「南方」の特質に与えていた形容詞である¹³。それではこうした葡萄酒の古代的・南方的・楽園的特質を「葡萄酒」詩群において確かめてみる。

『悪の華』において、古代的特質を端的に述べる詩篇は、V「あれら裸の時代の思い出を私は愛する (J'aime le souvenir de ces époques nues,)」である。古代的特質を述べた第一詩節と第三詩節を引用する。

J'aime le souvenir de ces époques nues,
Dont Phœbus se plaisait à dorer les statues.
Alors l'homme et la femme en leur agilité
Jouissaient sans mensonge et sans anxiété,
Et, le ciel amoureux leur caressant l'échine,
Exerçaient la santé de leur noble machine.
Cybèle alors, fertile en produits généreux,
Ne trouvait point ses fils un poids trop
onéreux,
Mais, louve au cœur gonflé de tendresses
communes,
Abreuvait l'univers à ses tétines brunes.
L'homme, élégant, robuste et fort, avait le

droit
D'être fier des beautés qui le nommaient
leur roi ;
Fruits purs de tout outrage et vierges de
gerçures,
Dont la chair lisse et ferme appelait les
morsures !
私はあの裸の時代の思い出を愛する、
その時代、〈太陽神〉は彫像を金色に染めて
楽しんでいたので。
あの頃は男も女も身軽で
嘘もなく不安もなく楽しんでいて、
それで愛情に満ちた空は彼らの背骨を撫でて、
気高い身体を健康にするべく鍛えていた。
〈大地の女神〉はその頃、豊饒な産物に満ち
満ちて、
息子たちをそれほど食い扶持がかかると思わ
なかったばかりか、
ひとしい愛情に満ちた母狼となって、
褐色の乳房で宇宙を潤していた。
男は優雅でたくましくて力強く、当然のこと
として
自分を王と呼ぶ美女たちを誇りにしていた。
傷みもなく、ひび割れもない果実みたいに、
その肉体は滑らかで引き締まり噛みつきたく
なるほどだった。
[...]
Nous avons, il est vrai, nations corrompues,
Aux peuples anciens des beautés inconnues :
Des visages rongés par les chancres du
cœur,
Et comme qui dirait des beautés de lan-
gueur ;
Mais ces inventions de nos muses tardives
N'empêcheront jamais les races malades
De rendre à la jeunesse un hommage pro-
fond,
— A la sainte jeunesse, à l'air simple, au
doux front,
A l'œil limpide et clair ainsi qu'une eau
courante,
Et qui va répandant sur tout, insouciant
Comme l'azur du ciel, les oiseaux et les

fleurs,
Ses parfums, ses chansons et ses douces
chaleurs !¹⁴
われわれ墮落した国民は、なるほど、
古代の人々の知らない美しさを持っている。
心の下疳にさいなまれた顔つき、
さらに物憂い美しさというべきもの。
しかし遅れてきたわれわれの詩神がこうした
発明品を作りだしたとしても
病気がちの種族は忘れずに
青春時代に深い崇敬を捧げるのだ、
— 聖なる青春時代は、気取らない態度で、優
しい顔つきで、
流れる水のような透き通った澄んだ目をして、
のんきに、すべてのものに振り撒いて行くのだ、
まるで青い空や鳥や花のごとく、
よい香りと歌と温かな熱を。

このように古代は歴史上の青春時代として、人間も自然も若さと美しさを十分に享受していた時代として表現される。しかしヒューバートも指摘する通り、それは肉体的で官能的な側面が強い¹⁵。この詩の表現と「孤独な男の葡萄酒 (Le Vin du solitaire)」の最後の三行を比較してみると、葡萄酒の作用がまさに古代的特質を取り戻すことだと見て取れる。

Tu lui verses l'espoir, la jeunesse et la vie,
— Et l'orgueil, ce trésor, de toute gueuserie,
Qui nous rend triomphants et semblables aux
Dieux !¹⁶
君は彼に注ぐ、希望と青春、そして生命を、
—そして乞食暮らしの誇りを、この宝は、
われわれを得意満面にし、神々に似たものにする！

希望と青春と生命は、古代＝青春時代の特色を代表する特質であり、複数形の神は古代の汎神教的神々を指している。「葡萄酒とハシッシュ」の言葉を使えば、葡萄酒は古代のような「第二の青春 (cette seconde jeunesse)」¹⁷を人間に取り戻させてくれるのだ。「葡萄酒の魂」の第五詩節も同様のことをうたっている。

« J'allumerai les yeux de ta femme ravie ;
À ton fils je rendrai sa force et ses couleurs
Et serai pour ce frêle athlète de la vie
L'huile qui raffermirait les muscles des lut-
teurs.¹⁸

俺はうっとりするお前の妻の目に明かりを灯す。
お前の息子には体力と顔色を取り戻してやろう
さらに人生の弱々しいこの闘技者のために
格闘家の筋肉を鍛えるオイルになってやろう。

葡萄酒は老いた妻に若さと容色を取り戻させ、
息子に強靱な肉体と生気を取り戻させる。妻の目
に明かりを灯すとは、性的意味合いを含むと考
えられる。先に引用した「あれら裸の時代の思い出
を私は愛する」において、「あの頃は男も女も身
軽で／嘘もなく不安もなく楽しんでいて、」とい
う表現があったが、この「楽しむ」は性的意味
合いを含みうる。古代はキリスト教的原罪の思想
を免れるがゆえに、性的な禁忌はなく「嘘もなく
不安もなく」楽しむことができた。葡萄酒は妻に
古代の女性と同じく性的欲望を取り戻させたと思
えられるだろう。また体力も生命力も乏しい息
子が、葡萄酒のおかげで「闘技者」に変身する
様子は、古代の「気高い身体」、「傷みもなく、
ひび割れもない果実みたいな、／滑らかで引
き締まったその肉体」を取り戻すことを表して
いる。「葡萄酒とハシッシュ」においてこの詩
句に該当する箇所を読むと、闘技者は「古代の
闘技者 (anciens lutteurs)」¹⁹であると明示
されているので、闘技者が古代の健康的な肉
体を意味することは確かである。ここにおい
ても葡萄酒の効果は主に官能的で肉体的な側
面で現れる。

「葡萄酒」詩群の中でも、「殺人者の葡萄酒
(Le Vin de l'assassin)」と「恋人たちの葡萄酒
(Le Vin des amants)」は、むしろキリスト教
的な観点から樂園的状态を取り戻す内容だと
考えられる。「恋人たちの葡萄酒」では「天
使」と「天国」という語が使用され、明ら
かにキリスト教的である。第一詩節二行目
から四行目「馬銜もなく、拍車もなく、手
綱もなく／葡萄酒に馬乗りになって／夢の
ように崇高な空に向かって旅立とう！(Sans
mors, sans éperons, sans bride, / Partons
à cheval sur le vin / Pour un ciel féerique
et divin !)」²⁰、こ

のワインを飲んだ恋人同士が天に向けて旅
立つという詩句も、明らかに性的な意味
合いを感じさせるが、いかなるくびきにも
繋がれてない様子は、その後の自由に泳
ぐ姿とあいまって、性的行為が原罪的な
意識から解放されていることを示唆して
いるのではないだろうか。恋人たちが捕
らわれている「容赦のない熱病 (Une
implacable calenture)」や「秘密の譫妄
(un délire parallèle)」²¹は、恋愛の熱
が飲酒によってさらに増長されている状
態を表していると考えられる。

また「殺人者の葡萄酒」は、快活な内容
の「葡萄酒」詩群の中で唯一犯罪を題材
にした作品であるが、恋愛の苦しみと殺
人の罪の意識を葡萄酒が一時的に癒して
くれる内容であると考えれば、葡萄酒の
作用そのものは他の詩篇と変わらない。
妻殺しの真の理由は、葡萄酒の作用で
なく、第十詩節が具体的に表す「本物の
恋愛 (l'amour véritable)」²²の苦しみ
にある。それゆえ最後の詩節は神への
冒涇の言葉である以上に、葡萄酒がキ
リスト教的な罪の意識を一時的に鈍らせ
、殺人者を恋愛と殺人以前の状態、す
なわち原罪以前の樂園的状态に回復さ
せてくれたととらえることが可能だろ
う。それは、第二詩節において、妻を
殺した後に飲酒した気分が妻に恋した
頃の夏の空に比較され、飲酒によって
青春時代を取り戻した様子からも窺
い知れる。

Autant qu'un roi je suis heureux ;
L'air est pur, le ciel admirable...
Nous avons un été semblable
Lorsque j'en devins amoureux !²³
王様と同じくらい俺は幸せだ。
空気は澄んで、空は素晴らしい・・・
俺達は似たような夏を持っていた
俺がお前に恋したときに！

葡萄酒は、先に引用した「孤独な男の葡萄酒」
のなかにも表れていたように、「誇り (l'orgueil)」
を取り戻させる。しかしながら「誇り」の回復
によって古代の神々と比べられる存在になる
とき、その「誇り」もまた精神的というより
は肉体的で官能的側面が強いと考えられる。
「あれら裸の時代の思い出を私は愛する」
において、「男は優雅

でたくましくて力強く、当然のこととして／自分を王と呼ぶ美女たちを誇りにしていた」ととき、それは肉体的で官能的な誇りである。「葡萄酒の魂」は、もともと初版以前は「実直な人々の葡萄酒 (Le Vin des honnêtes gens)」²⁴ という題名であり、労働によって疲れた民衆が葡萄酒によって肉体的・官能的に「誇り」を取り戻す内容である。さらに「屑屋たちの葡萄酒」においてもまた、都市生活の下層労働者が葡萄酒の飲酒によって自らを統治者や軍隊とみなすとき、それは社会的に「誇り」を取り戻すことである。ただし、マリオ・リクテルが解説するように、労働は神学的に見て神が人間に強いたものであり、神が人間の「誇り=奢り」を罰した結果と見なすことができる以上²⁵、労働からの解放は人間にとって原初の「誇り」の回復につながる。「人殺しの葡萄酒」や「恋人たちの葡萄酒」においても、キリスト教的に見て男女の恋愛とその苦しみは原罪の結果であるゆえ、葡萄酒が殺人の罪の意識を和らげることで、本来の肉体的・官能的な「誇り」を取り戻すことにつながる。「孤独な男の葡萄酒」においては、孤独な詩人は「敬虔」であり、それは当然キリスト教的であることを意味する。葡萄酒が恋愛や賭け事、音楽よりも「誇り」を取り戻してくれるとき、恋愛も賭け事も音楽(人間の苦痛を奏でる)もキリスト教的な観点で罪と関連するゆえ、そうした罪の意識を葡萄酒が忘れさせることで、脱キリスト教的で古代の神々に似た「誇り」を取り戻すことにつながると考えられる。

葡萄酒は、その作用とともにその出自が地理的にいって、ヨーロッパの「南方」と繋がることは想像に難くない。葡萄の実る地域がヨーロッパの南側であり、古代ローマ帝国が葡萄酒文化を広めた歴史からも、葡萄酒=南方という図式がよくあてはまる。この南方的性格の象徴が葡萄を育てる太陽の存在であろう。「葡萄酒の魂」において葡萄酒の魂はこう語る。

Je sais combien il faut, sur la colline en
flamme :
De peine, de sueur et de soleil cuisant
Pour engendrer ma vie et pour me donner
l'âme ;²⁶

俺にはどれだけ必要だかわかっている、燃えるような丘で、
苦勞と汗、そして焼けるような太陽が
俺の命を産みだして俺に魂を授けてくれるために。

葡萄栽培が人間の労働と太陽の恵みの結果であることが述べられているが、「燃えるような丘」「焼けるような太陽」という表現は、フランスであれば南半分には照りつける夏の太陽とその土地を明らかに想起させる。この太陽と葡萄酒の関係が「屑屋たちの葡萄酒」の最終行において「葡萄酒、太陽の聖なる息子」という表現を導く。「葡萄酒とハシッシュ」において葡萄酒は「内なる太陽 (le soleil intérieur)」²⁷ と呼ばれ、ハシッシュや阿片も太陽の比喩で表されるものの²⁸、ハシッシュや阿片は「太陽の息子」とまでは呼びえない。

「殺人者の葡萄酒」は先の引用にあるように空気が澄んで青い夏の空を想起させる。「孤独な男の葡萄酒」は太陽の存在は明示されていないが、「浮かれ女 (une femme galante)」²⁹ が月に喩えられる点に注目すれば、葡萄酒にその反対の太陽を見て取ることも可能であろう。「恋人たちの葡萄酒」においても「朝の水晶の青の中で (Dans le bleu cristal du matin)」³⁰ という表現は、太陽の輝く朝の澄んで青い空を思い浮かべさせる。このように葡萄酒の酔いは太陽の輝く時節を取り戻す効果がある。逆にいえば、現実においては太陽のない時節であることが表される。「葡萄酒の魂」が歌うのは「ある夜 (Un soir)」³¹、屑屋がさまようのも「街灯の赤い光の下で (à la clarté rouge d'un réverbère)」³²、「殺人者の葡萄酒」も「今夜 (ce soir)」³³、「恋人たちの葡萄酒」は時が明確でないが、他の四編から見て朝と対極の夜と考えても差し支えないだろう。このように夜に昼の太陽を昇らせるのが葡萄酒の作用だと考えられる。そして太陽の季節が短く葡萄を实らせるのに十分ではないパリを含むヨーロッパの「北方」地域に、「南方」の太陽を昇らせるのが葡萄酒の作用だと考えられる。しかし『1846年のサロン』で定義したロマン主義の特質、すなわち「内面性、精神性、色彩、無限への憧れ」に照らし合わせるとき、葡萄酒が与えてくれるのは外面的で地上的な特質、そ

れはまさに「南方」的特質でしかない。葡萄酒の作用の限界がそこに見られるとっていい。

3. 太陽と葡萄酒、抒情詩人の力

「葡萄酒」の部は、さらに詩人の力の観点から読むとき、やはり詩集に欠かせない役割があるのではないかと考えられる。そこにおいて詩人の力の根源的由来とその限界が示されていると考えられる。1851年の「葡萄酒とハシッシュ」の第六章において、葡萄酒とハシッシュの共通の作用として「人間の極度に詩的な発展 (le développement poétique excessif de l'homme)」³⁴を挙げている。すなわち、詩的能力とはどんなものなのか比喩的に説明するために、葡萄酒やハシッシュをボードレールは取り上げたのである。「阿片吸飲者」の第六章においても、阿片の研究の目的は「夢想するという生まれつきの能力を増大させるため、阿片はどれほどの力を持っているのか示すこと (de montrer quelle puissance a l'opium pour augmenter la faculté naturelle de rêverie)」³⁵にあると述べている。葡萄酒、ハシッシュ、阿片という三者は症状の違いがあっても、詩的能力を増大させる点で共通している。「葡萄酒」の部は、様々な人格に葡萄酒が作用する様子を描くことで、詩的能力とはいかなるものかを語っていると考えられる。葡萄酒の力と詩人の力を比べて考えるとき、「葡萄酒」の部の「葡萄酒の魂」と「屑屋たちの葡萄酒」のペアと、「憂鬱と理想」の部の初版における冒頭の二篇「祝福」と「太陽」のペアが対比されることに気付かされる。

注釈において指摘されるように、「葡萄酒の魂」には「祝福」と共通の語「恵まれない (deshérité)」と「神々の食べ物 (l'ambroisie)」が使用されていて、両者の関連を窺わせる³⁶。

Pourtant, sous la tutelle invisible d'un
Ange,
L'Enfant déshérité s'enivre de soleil,
Et dans tout ce qu'il boit et dans tout ce
qu'il mange
Retrouve l'ambroisie et le nectar vermeil.³⁷
それでも、あるく天使>が秘かに保護していて、
恵まれないく子供>は太陽に酔いしれ、

飲むものすべて、食べるものすべてを
神々の食べ物や真っ赤な神酒だと思ふ。

特に「祝福」のこの第六詩節は、「葡萄酒」の部と密な関連性がある。なぜならば、この詩節中の「恵まれないく子供>は太陽に酔いしれ」を「恵まれないく人間>はく太陽>の息子 (=葡萄酒) に酔いしれる」と書き換えれば、そのまま「葡萄酒の魂」と「屑屋たちの葡萄酒」の内容 (さらにいえば「葡萄酒」詩群全体) を要約することになるからである。「祝福」の第六詩節は詩人の子供時代を表す描写だが、飲酒は大人の権利であることを考えあわせるとき、「恵まれない子供は太陽に酔いしれ」、「恵まれない大人は太陽の息子に酔いしれる」と対比することも可能だろう。「恵まれない詩人」と「恵まれない人間」、「恵まれない子供」と「恵まれない大人」、「太陽」と「太陽の息子」、このように対比関係が認められる。

初版において「祝福」に続く「太陽」は、まさに昼に「恵まれない詩人=子供」が太陽に酔いしれる様子を描き、一方「葡萄酒の魂」に続く「屑屋の葡萄酒」は、夜に「恵まれない人間=大人」が「太陽の息子=葡萄酒」に酔いしれる様子を描いている。「屑屋たちの葡萄酒」において屑屋を詩人に喩える以上、ボードレールはこの比較を十分考慮していたと考えられる。また「葡萄酒とハシッシュ」の「葡萄酒」に関する記述においても屑屋を詩人と比較し、しかも「若い詩人 (les jeunes poètes)」³⁸と限定しているの、屑屋の老いと詩人の若さの対比もボードレールは十分意識していたと考えられる。それでは「太陽」と「屑屋の葡萄酒」を引用してみよう。

LE SOLEIL

太陽

Le long du vieux faubourg, où pendent aux
masures
Les persiennes, abri des secrètes luxures,
Quand le soleil cruel frappe à traits redou-
blés
Sur la ville et les champs, sur les toits et les
blés,

Je vais m'exercer seul à ma fantasque es-
crime,
Flairant dans tous les coins les hasards de
la rime,
Trébuchant sur les mots comme sur les
pavés,
Heurtant parfois des vers depuis longtemps
rêvés.

秘かな淫蕩を隠している鎧戸が
あばら屋に垂れ下がる、古い場末の街に沿って、
それは厳しい太陽が立て続けの矢で
街と田園、屋根と麦を叩いている時分、
私は風変りなフェンシングの練習を一人で
うのだ、
あらゆる街角で脚韻の思いがけない巡りあ
わせを嗅ぎ付け、
舗石につまづくように語につまづき、
時おり長い間夢見ていた詩句にぶつかる。

Ce père nourricier, ennemi des chloroses,
Éveille dans les champs les vers comme les
roses ;
Il fait s'évaporer les soucis vers le ciel,
Et remplit les cerveaux et les ruches de miel.
C'est lui qui rajeunit les porteurs de
béquilles
Et les rend gais et doux comme des jeunes
filles,
Et commande aux moissons de croître et de
mûrir
Dans le cœur immortel qui toujours veut
fleurir !
この養父は、萎黄病の大敵で、
田園でバラと並んでミミズを目覚めさせる。
彼は空に向けて心配事を蒸発させ、
脳髓と巣箱を蜂蜜で一杯にする。
彼こそが松葉杖をつく人たちを若返らせ、
若い娘のように陽気で優しくしてしまう、
さらに心で作物が育って熟するようにと命じ
るのだ、
その心は不死で花をいつも咲かせたがって
いる！

Quand, ainsi qu'un poète, il descend dans
les villes,
Il ennoblit le sort des choses les plus vils,
Et s'introduit en roi, sans bruit et sans va-
lets,
Dans tous les hôpitaux et dans tous les pa-
lais.³⁹

詩人のように、太陽が街に降りてくるとき、
彼はもっとも卑しい物の身の上も気高くし、
音もたてず、従僕もなしに王として、
あらゆる病院、あらゆる宮殿に忍び込む。

LE VIN DE CHIFFONNIERS

屑屋たちの葡萄酒

Souvent, à la clarté rouge d'un réverbère
Dont le vent bat la flamme et tourmente le
verre,
Au cœur d'un vieux faubourg, labyrinthe
fangeux
Où l'humanité grouille en ferments ora-
geux,
しばしば、外灯の赤い光に照らされて、
風はその炎と火屋に吹きつけるとき、
泥だらけの迷宮みたいな、古い場末の中心で、
そこで人類は嵐の種でうごめくとき、

On voit un chiffonnier qui vient, hochant la
tête,
Butant, et se cognant aux murs comme un
poète,
Et, sans prendre souci des mouchards, ses
sujets,
Épanche tout son cœur en glorieux projets.
ひとりの屑屋がやって来るのが見える、彼は
首を振り、
躓き、詩人のように壁にぶつかり、
スパイやその手下を心配することなく、
華々しい計画を抱いた心のありったけを打ち
明ける。

Il prête des serments, dicte des lois sub-
limes,

Terrasse les méchants, relève les victimes,
Et sous le firmament comme un dais sus-
pendu
S'enivre des splendeurs de sa propre vertu.
彼は宣誓し、最高の法律を口述し、
悪人を投げ飛ばし、犠牲者を起こし、
吊り天蓋のような天空のもと
自分自身の美德の素晴らしさに酔いしれている。

Oui, ces gens harcelés de chagrins de mé-
nage,
Moulus par le travail et tourmentés par l'âge,
Éreintés et pliant sous un tas de débris,
Vomissement confus de l'énorme Paris,
そう、家庭の悲しみに悩まされたこうした
人々は、
仕事に打ちのめされて寄る年波に苦しめられ
巨大なパリの雑多な排出物である、
たくさんのガラクタを背負って疲れ果てて腰
も曲がり、

Reviennent, parfumés d'une odeur de fu-
tailles,
Suivis de compagnons, blanchis dans les
batailles,
Dont la moustache prend comme les vieux
drapeaux.
Les bannières, les fleurs et les arcs triom-
phaux
戻って来る、酒樽のにおいを香らせて、
続く仲間も、戦闘で白髪になって、
彼の口髭は古い旗のようにくっついている。
のぼり旗、花々、そして凱旋門が

Se dressent devant eux, solennelle magie !
Et dans l'étourdissante et lumineuse orgie
Des clairons, du soleil, des cris et du tam-
bour,
Ils apportent la gloire au peuple ivre
d'amour !
彼らの前にそびえ立つ、厳かな魔法だ！
それからラッパと太陽と叫び声と太鼓の
けたたましくも光り輝く大饗宴のなかで

彼らは愛に酔った民衆に栄光をもたらすのだ！
C'est ainsi qu'à travers l'Humanité frivole
Le vin roule de l'or, éblouissant Pactole ;
Par le gosier de l'homme il chante ses ex-
ploits
Et règne par ses dons ainsi que les vrais
rois.
このようにして軽薄なく人類を>を通じて
葡萄酒は黄金を押し流す、まばやいパクトロ
ス川となって。

人間の喉を通して葡萄酒は自らの武勲を歌い
本物の王たちと同じく施すことで統治する。

Pour noyer le rancœur et bercer l'indolence
De tous ces vieux maudits qui meurent en
silence,
Dieu, touché de remords, avait fait le som-
meil ;
L'Homme ajouta le Vin, fils sacré du So-
leil !⁴⁰

黙って死んでいくこれらすべての年老いた呪
われ者たちの
恨みを溺れさせ怠惰を揺するため
神は、後悔に心動かされて、眠りを作り給うた。
<人間>は<葡萄酒>、<太陽>の聖なる息
子を付け加えたのだ！

この二つの詩篇にはいくつもの共通点がある。
まず登場人物が現れる舞台がいずれもパリの場末
であること。次に最終的に主人公は、登場人物で
あるというよりも太陽と葡萄酒であること。「太
陽」においては、第一詩節でパリの場末をさまよ
う詩人である「私」の姿が描かれるが、第二詩節
では「この養父」、第三詩節では王として擬人化
された太陽の姿が中心に描かれる。マリオ・リク
テルが詳細に述べているように、「屑屋たちの葡
萄酒」の内容は、あるひとりの屑屋（第一詩節か
ら第三詩節）の描写から屑屋たち一般（第四詩節
から第六詩節）へと広がり、さらに人間全般（第
七詩節と第八詩節）へと拡大されていく構成を
取っている。第七詩節において、中心が屑屋から
王に擬人化された葡萄酒に移り、さらに第八詩節
で葡萄酒は「太陽の息子」の称号を与えられる。

「太陽」の場合、「養父」である太陽が田園で花を咲かせ作物を実らせるとき、南方であれば当然葡萄も含まれるはずである。太陽が王であり、太陽の息子も王に喩えられることは、血統の継承を思い起こさせる。さらに「太陽」の最終詩節において、太陽と詩人が比べられるとき、詩人もまた「太陽の息子」の名に値すると気付かせられる。昼間は太陽が老人を若返らせ病人を治癒し、夜は葡萄酒が老人を若返らせ貧しい人に王としての誇りを取り戻させてくれる。恵まれない詩人もまた昼間は太陽に酔うことで詩的靈感を獲得し、夜は屑屋のように葡萄酒に酔うことで靈感を得ると考えられる。このように二つの詩篇を比べるとき、太陽の力の偉大さ、そして太陽の力が詩的靈感の根源の光に結びつくことが理解される。「祝福」の最終詩節において、詩人の「まばゆく透明なこの美しい王冠 (ce beau diadème éblouissant et clair)」は「原初の光の聖なる源から汲みだされた / 純粋な光で (de pure lumière, / Puisée au foyer saint des rayons primitifs.)」⁴¹ 出来ていると述べられているが、太陽の光はこの世においてその光を表すと考えられるだろう。「あれら裸の時代の思い出を私は愛する」に現れるように、古代において太陽神フォイボス＝アポロンは詩歌を司る神である。

太陽の力と詩人の力が比較されるとき、両者に共通する力とは「もっとも卑しい物の身の上を気高くする」力である。「屑屋たちの葡萄酒」の場合、内容的には葡萄酒がその力によって卑しい職業の屑屋たちを、君主や軍人といった高貴な職業の人間に変身させるのだが、芸術的には詩人が太陽から受け継いだ力によって、屑屋という都市の卑しい職業を営む人物を高貴な人物へと変身させると考えられる。こうした錬金術に似た詩人の変容の力に関して、ボードレールは「わが同時代の数人についての省察 (Réflexions sur quelques-uns de mes contemporains)」の「テオドル・ド・バンヴィル (Théodore de Banville)」(1861)において、抒情詩人の力として説明する。

Tout poète lyrique, en vertu de sa nature, opère fatalement un retour vers l'Éden perdu. Tout, hommes, paysages, palais, dans le

monde lyrique, est pour ainsi dire *apothéosé*.⁴²

いかなる抒情詩人も、自らの本性ゆえに、失われたくエデンの園へと宿命的に回帰しようとするものである。すべては、人間も、風景も、宮殿も、抒情的世界では、いわば神格化される。

すべてを「神格化」する力は、言い換えれば理想化する力である。抒情詩人は、全てのものを神格化することで、神学的には「エデンの園」へと回帰し、歴史的には「古代」へと回帰していく。詩人の力と葡萄酒の力を、太陽の力、神の力に結びつけるとき、その力は筆者の観点でいえば「南方」的な力である。「祝福」の第六詩節は、そもそも詩人は子供時代から青春時代を「太陽の息子」としてあらゆるものを神格化していたことを表している。「真っ赤な神酒」はもちろん葡萄酒を想起させる。この時代をもう一度取り戻そうとする試みが、「葡萄酒」詩群の本来的な意図であると考えられるだろう。

「屑屋たちの葡萄酒」は、最も異同の多い詩篇として知られている。特に初版以前のヴァージョンでは、神が人間の苦しみを癒すために「太陽の息子」である葡萄酒を付け加えたことになっていた。ボードレールが葡萄酒の役割と意義に関して考える過程において、初版以前は葡萄酒の古代的・南方的・楽園的性格に重きを置き、古典主義的な内容が考えられていたのではないだろうか。葡萄酒はキリスト教においてイエス・キリストの血を意味する以上、葡萄酒にはキリストの聖なる血が人間の苦しみを慰めるという意味合いが強く込められていたと考えられる。「神は葡萄酒、太陽の息子を加えた (Il [= Dieu] ajouta le vin, fils sacré du soleil)」⁴³ を、「神が神の息子であるイエスを加えた」と言い換えればそのままキリスト教的教義に適う。神は人間の奢りを罰し労働を強いたものの、人間の苦しみを救うために眠りとともに葡萄酒＝キリストの血を与えたとすれば、これはまさにキリスト教的神に対する葡萄酒賛歌である。「葡萄酒の魂」においても、初版以前には葡萄酒の魂は人間を「恵まれない友 (cher déshérité)」⁴⁴ ではなく「我が愛

する者 (mon bien aimé)⁴⁵と呼んでいた。その場合、人間と葡萄酒が結合して生まれた詩は神への感謝の捧げものの意味を表すだろう。初版以前の形では、「葡萄酒の魂」も「屑屋たちの葡萄酒」も、十九世紀パリという現代において卑しいものを神格化する形で古典的抒情詩を実現する試みだったのではないだろうか。

4. 「死」、もうひとつの太陽

詩人が初版において「屑屋たちの葡萄酒」の最終節に変更を加えたとき、神に対する人間の態度が決定的に変わり、神に対する人間の反抗心が強調されることになった。「葡萄酒とハシッシュ」において、葡萄酒は人間と対等で友愛に溢れる存在であり、さらに人間+葡萄酒が「上位の人間 (l'homme supérieur)⁴⁶」を産みだすと述べられる。この葡萄酒の人間的な性格、そして人間と葡萄酒が結合して神に対抗しうる存在になる点を、詩人は初版において強調したかったのだと考えられる。神に強いられた労働に人間は納得できず、その労働によって葡萄酒を作り出し、再び神に対抗し肩を並べようとする人間の偉大さを示そうとしたのだと考えられる。その意味では葡萄酒は第二の知恵の木の実に較べられるだろう。このように初版において「屑屋たちの葡萄酒」は、南方的・古典的性格を弱めロマン主義的性格を強めることになった。さらに「殺人者の葡萄酒」が続くとき、妻を殺し神も悪魔もものとしなないロマン主義的態度が表立って感じられることになった。

初版において「葡萄酒」の部がロマン主義的傾向を帯びるにいたった理由は、詩集の構成の観点から、露骨に神への反抗を述べる「反抗」の部と、死に最終的な救いを求める「死」の部の間に置かれたことにあると考えられるだろう。特に「葡萄酒」の部と「死」の部の対比の必要性があったからではないだろうか。「葡萄酒」の部において登場するのは屑屋、殺人者、孤独な詩人、恋人たちであり、「死」の部で登場するのは恋人たち、貧しい人々、芸術家である。すなわち詩人は二つの部でほぼ同じ「恵まれない」人々を取り上げ、そうした人々に対して葡萄酒と死がどのように作用するのか、対比的に描きたかったのだろう。

「反抗」の部の「聖ペテロの否認 (Le Renie-

ment de saint Pierre)」において、神は「肉と葡萄酒をたらふく取った専制君主 (un tyran gorgé de viande et de vins)⁴⁷」に喩えられ、「サタンの連祷 (Les Litanies de Satan)」においては、サタンが楽園を追放された人間の「養父 (Père adoptif)⁴⁸」と呼ばれる。神は人間からどんどん遠い存在となり、人間にとってサタンが共感しうる存在となる。その状況と、「葡萄酒」の部において葡萄酒が神の手を離れ人間と手を結ぶ様子は似ているのではないだろうか。葡萄酒が「太陽の聖なる息子」であるとき、それはすでに神の息子のはずである。しかしその息子は神に愛でられることなく養父である人間に引き渡される。キリスト教的観点で言えば、葡萄酒はイエスの血である以上、太陽の息子=神の息子イエスとして人間の苦しみを救済してもよいはずだ。しかし葡萄酒が人間の手に渡るとき、人間は自らの苦しみを自らの手で「人工的に」癒そうとするにすぎない。しかも葡萄酒は一時的に肉体的・官能的側面においてしか癒す力はない。その点で葡萄酒の力はイエスの力のパロディーに過ぎなくなる。このように「葡萄酒」の力に限界があるゆえに、「死」の力が最終的に求められることになる。「屑屋たちの葡萄酒」に対応する「貧しい人々の死 (Le Vin des pauvres)」の第一詩節はそのことをよく表している。

C'est la Mort qui console, hélas ! et qui fait vivre ;

C'est le but de la vie, et c'est le seul espoir
Qui, comme un élixir, nous montre et nous enivre,

Et nous donne le cœur de marcher jusqu'au soir ;⁴⁹

<死>こそが、ああ！ 慰めて生きさせるのだ。それが生の目的であり、唯一の希望であり、妙薬のように、われわれを元気づけて酔わせ、そして宵まで歩かせる勇気を与えるのだ。

このように「太陽の息子」=「葡萄酒」に代わって、「死」=「妙薬」が人々を酔わせる。さらに初版の最後の詩篇「芸術家の死 (La Mort des artistes)」においてこう述べられる。

C'est que la Mort, planant comme un soleil
nouveau,
Fera s'épanouir les fleurs de leur cerveau !⁵⁰
＜死＞が、新しい太陽のように見下ろし、
彼らの脳髓から花々を咲かせるだろう！

この初版の結論は、「太陽」の内容と見事に対応していた。詩人の脳髓から花々を咲かせる太陽が消えた地では、太陽の息子たる葡萄酒も最終的な救いをもたらす力をもたない。死のみが「新しい太陽」となって、花々を咲かせ人間の苦しみに救いを与えることができるのである。

葡萄酒の力と詩人の力を比較する観点からいえば、「屑屋たちの葡萄酒」の最終詩節の変更は、詩人の力に関しても同じような意味合いの変化を考慮することができるのではないだろうか。「詩人は太陽に酔っている」「詩人は太陽の息子である」という観点では、詩人はまさに古典的抒情詩人の特質を備えていると考えられる。「祝福」において「太陽に酔う子供」だった詩人は古典的抒情詩人として生まれている。「純粋な光」から得た力はまさに太陽から得た力であり、神から得たものだろう。詩人は神が加えたといっているはずだ。しかし古典的抒情詩人が、現代という時代とパリという土地の風土に降り立ったとき、そこは太陽の恵みの少ない世界、すなわち古代から遠く、南から遠く、楽園から遠く、神から遠い悪の地に流されたことを自覚せざるをえない。その自覚において詩人は養い育てる父＝太陽のもとで古典的抒情詩人であることを捨て、新たな養父＝サタンの力を得てロマン主義的抒情詩人になることを決意する。神を褒め称える古典的抒情詩人として生まれながら、神を呪うロマン主義的抒情詩人になるのである。葡萄酒は、人間に飲まれて死ぬことでポエジーを生み神へと向かう。人間もまた死ぬことで「ひとつのめずらしい花のような (comme une rare fleur)」⁵¹ポエジーを生み神へと向かうのではないだろうか。

結びに代えて

以上のように『悪の華』初版における「葡萄酒」詩群の役割と意義を探ってきた。「葡萄酒」詩群は、もともとは古代的・南方的・楽園的特色

を描き出し、現代において古典主義的抒情詩の可能性を探る側面が強かったと考えられる。しかし初版に「葡萄酒」の部として「反抗」の部と「死」の部に挟まれたとき、現代・北方・失楽園において古典主義抒情詩を復活させることの限界を表す部になったと考えられる。それは葡萄酒の力の限界であり、古典主義的抒情詩人の力の限界を表している。それゆえに最終部「死」の部において、死の力だけが「唯一の希望」をもたらすのだ。

＜注＞

1 ポードレールのテキストと書簡は、底本としてプレイヤード版全集を用いた。Charles Baudelaire : *Œuvres complètes*, éditées par Claude Pichois, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », tome I, 1975, tome II, 1976. 以後略号OCを用い、巻数とページ数を添えて示す。Charles Baudelaire : *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois avec la collaboration de Jean Ziegler, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2vol, 1973. 以後略号CPIを用い、巻数とページ数を添えて示す。ポードレールの詩篇および作品名の邦題、さらにポードレール以外の人名および作品名に関しては、おおよそ阿部良雄訳『ポードレール全詩集』I・II、ちくま文庫、1998年、および『ポードレール批評』1～4、ちくま文庫、1999年の訳語に合わせたが、引用文は拙訳による。主な参考文献は注のなかで指示する。

2 Walter Benjamin : *Charles Baudelaire Un poète lyrique à l'apogée du capitalisme*, traduit de l'allemand et préface par Jean Lacoste d'après l'édition originale établie par Rolf Tiedemann, Paris, Éditions Payot, p.205 .

3 ポードレールの芸術論における「北方」性に関しては、以下の拙著を参考にされたい。清水まさ志『L'inspiration nordique de Baudelaire ポードレール「北方」のインスピレーション』、駿河台出版社、2005年。また詩作品に関しては、以下の拙論を参考にされたい。[La composition du poème « Les Phares » de Baudelaire]、『フランス語フランス文学研究』第88号、日本フランス語フランス文学会、2006年、pp.59-72。「ポードレール『悪の華』スプリーレン詩群を読む—入れ子構造の容器と中味について—」、『富山大学人文学部紀要』第56号、富山大学人文学部、2012年、pp.371-394。「ポードレール「夕べの薄明」を読む—書き継がれるテキスト—」、『富山大学人文学部紀要』第58号、富山大学人文学部、2013年、pp.289-

313. 「ボードレール『悪の華』レスボス詩群を読む」、『富山大学芸術文化学部紀要』第8巻、富山大学芸術文化学部、2014年、pp.112-133。「ボードレールの詩篇『シテールへの旅』を読む」、『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第6号、北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部、2014年、pp.327-341。
- 4 OC, I, 1045.
- 5 OC, I, 1045-1057.
- 6 Graham Robb : *La Poésie de Baudelaire et la poésie française, 1838-1852*, Paris, Aubier, 1993, pp.139-143 et 151-155.
- 7 Pierre Laforgue : *Baudelaire dépolitiqué Quatre études sur Les Fleurs du Mal*, J & S éditeur, Paris, 2002, pp.41-59.
- 8 前掲書清水まさ志『L'inspiration nordique de Baudelaire ボードレール「北方」のインスピレーション』、pp.85-115。
- 9 同書『L'inspiration nordique de Baudelaire ボードレール「北方」のインスピレーション』、pp.288-295。
- 10 Charles Baudelaire : *Les Fleurs du Mal. Texte de la seconde édition suivi des pièces supprimées en 1857 et des additions de 1867*, édition critique établie par Jacques Crépet et Georges Blin, Paris Librairie José Corti, 1942, p.262.
- 11 OC, I, 421.
- 12 OC, I, 465-466.
- 13 OC, I, 421.
- 14 OC, I, 11-12.
- 15 J.-D. Hubert : *L'Esthétique des « Fleurs du Mal » Essai sur l'ambiguïté poétique*, Genève, Slatkin Reprints, 1993, pp.54-55.
- 16 OC, I, 109.
- 17 OC, I, 379.
- 18 OC, I, 105.
- 19 OC, I, 380.
- 20 OC, I, 109.
- 21 OC, I, 110.
- 22 OC, I, 108.
- 23 OC, I, 107.
- 24 OC, I, 1045.
- 25 Mario Richter : *Baudelaire Les Fleurs du Mal Lecture intégrale*, tome II, Genève, Éditions Slatkine, 2001, p.1261.
- 26 OC, I, 105.
- 27 OC, I, 379.
- 28 OC, I, 403 et 433. Marc Eigeldinger : *Le Soleil de la Poésie Gautier Baudelaire Rimbaud*, Neuchâtel, À la Baconnière, 1991, pp.117-120.
- 29 OC, I, 109.
- 30 OC, I, 110.
- 31 OC, I, 105.
- 32 OC, I, 106.
- 33 OC, I, 108.
- 34 OC, I, 397.
- 35 OC, I, 497.
- 36 阿部良雄訳『ボードレール全集 I 悪の華』、筑摩書房、1983年、p.582。
- 37 OC, I, 7.
- 38 OC, I, 381.
- 39 OC, I, 83.
- 40 OC, I, 106-107.
- 41 OC, I, 9.
- 42 OC, II, 165.
- 43 OC, I, 1051.
- 44 OC, I, 105.
- 45 OC, I, 1046.
- 46 OC, I, 387.
- 47 OC, I, 121.
- 48 OC, I, 125.
- 49 OC, I, 126.
- 50 OC, I, 127.
- 51 OC, I, 105.

